

「カンボジアの戦争遺産」 (パイリンへの旅 その2)

< 国境周辺の風景 >

ここではパイリンより国境へ向かう途中で発見した家屋を紹介したい。規模は5~6m四方の高床式で、お世辞にも「素晴らしい」とは言えないバラック小屋で、カンボジアの伝統的とか、地方的とかいう家屋ではない。しかも、カンボジアの至る所で見かけられるもので、いつもならば目にも止まることもない。



パイリンの町から車に乗ってタイ国境へ向かう道を行くと、家々が散在する緑に覆われた風景が展開する。

そんな風景を何気なく車窓から眺めていたら、一瞬、視点が止まった。「あっ」と瞬間的に閃くものが走った。弾薬箱を解体した古材で造られた家だった。



パイリンからタイ国境まで道沿いで、このように弾薬の箱を解体して壁材に使っている建物を10棟ほど見つけた。勾配の緩いトタ

ン屋根と、弾薬の箱を解体した板を縦張りした壁の家である。緑色ペンキが塗られた板には、製造番号だろうか、白で書かれた数字までも見える。

< 古材の利用法、古今東西 >

古い建物の材料を使って家を建てるケースは世界各地で見られるが、この弾薬の箱の例のように建物以外の用途に使われていた材料を利用するケースはあまり例がないように思われる。10年以上前、大阪府の河内地方を通る「竹ノ内街道」沿いで、板壁に船板の古材が使われていた「銀屋」という屋号の江戸時代の豪商の家を見たことがある。廃船を解体した古材 船形に弓なりとなった古材を巧みに組み合わせた重厚感のある見事な壁だった。至る所に船釘の跡が残り、それが風合いを与えていた。これは江戸時代の大工職人が本来の機能を失った古材の中に美しさを見出し、創意を凝らし、新たな息吹を吹き込んだ特異な例かもしれない。

最近の商店建築などでは、古い民家の解体した古材を組み直し古い民家風の居酒屋など、積極的に古材を生かしたインテリアデザインのものも多く見かけられる。しかし、これらの多くは、無機能・無装飾の鉄筋コンクリート・ビルの四角い箱の中に、桁や梁などの古材をボルトで繋いだいわゆる「似せもの」で、その材が本来持っていた構造材としての意味合いが削ぎ落とされたものが多い。店舗の配置、間取りに合わせるために、切断されたりして見るも無残な形状となった梁や桁を見ると、心の中に何ともいえない残念さが漂うのは私だけであろうか。

ヨーロッパでも古風な内装のレストランをしばし見かけるが、日本とは違い、現存する古い伝統的建造物を改修したものが多い。材は本来あるべき位置に長年、収まり、オーセンティックである。この辺りに日本とヨーロッパの文化の違いを垣間見る。

< 建築材料と近隣事情 >

話をこの弾薬箱で作られた建物に戻し、その材料性の問題について考えてみよう。建築物の材料としては、普通、その近くで得られ、気候風土にも適したものが用いられる。日

本の建築の多くが木造であるのも、日本では木材が豊富に産出されたことによるし、中東地域の土作りの家も近場で取れる材料の内、安価で、気候風土に適していたのが土であったことによる。ギリシャ、アテネのパルテノン神殿には、日本人にとっては非常に豪華に感じられる大理石が使われている、これもパルテノン近辺で大理石が多く産出されたことに起因していると言って良いだろう。カンボジアの建物は、基本的には木造だが、軸組みのみが木造で、壁、屋根などは草葺くさぶきのものもまだまだ多い。

カンボジアの30年近くに続いた内戦の舞台は、次第にポル・ポト支配地域のタイ国境周辺部に移り、弾薬箱も移転を繰り返し、最後に行き着いたのが、多分、ここパイリンの地であったのだろう。パイリン近くにあったものは「戦争」であり、その産物として残された大量の弾薬箱が建築の材料に使われたと考えると、「建造物の材料には、通例、その近くで産出される材料が用いられる」という上述の不文律をこの弾薬箱で出来た建築物についても当てはめることができる。

もっとも壁面全てを弾薬箱の板で覆うほどの量を確保できず、普通の板材と併用している例が少なくない。しかし、日本の船板古材の民家で見られたように、板の割り付けなどに大工職人のこだわりは見られない。とくに弾薬箱の板であったということは意識されず、ただ単に材料節約という観念しか働いていないように思われる。

上述した船板や木造家屋の梁などは、材料本来が持っていた機能が終了したため、他の用途に転用された。まだパイリンが戦争の行われている地域であれば、弾薬箱は弾薬輸送に必要不可欠なものだろう。弾薬箱が解体され、建築材料として多用されているということは、弾薬箱が本来の機能を終了したということだろう。つまりは弾薬箱の板を利用した建物の存在は、建物所有者が意図した材料の節約といった側面以上に「この地域で戦争は、すでに終結した」ということを物語る証あかしであると言えるだろう。

<カンボジアの戦争遺産>

パイリンの緑の中に建つ家屋には美的、技巧的といった意味合いはほとんど見出せない。しかし、弾薬箱の板壁の家には、長く続いたカンボジアの「戦争の終焉」という重要な意味が込められているように思えて仕方がなかった。ただの変哲のないバラック小屋が威風堂々とした「戦争遺産」のように映えて見えた。そしてカンボジアの幽遠地であったパイリンに来られるようになったことも、カンボジアに本当に「平和」が訪れたという一つの証に思われた。あと10年も経つと、これらの一種、仮設的な建築もその寿命を終えて、暫時、建て替えられ、時代の経過と共に、長く続いた戦争の傷跡も消えて行くのだろう。現に私の住む、シェムリアップ周辺部では、もう、そういった戦争の傷跡を見かけることはほとんどない。

2000年11月8日

上智研修所にて

荒樋久雄